

2003年8月19日

大井の 窓から

中村祐司

10年前に大学の職を得て、栃木県での新生活をスタートさせた。郊外に出ると田んぼが一面に広がり、遠くには山々が連なる。まさに関東平野の北端に位置しているのだなあ、という実感が迫ってきた。

小学生の時の日光への修学旅行は一つの思い出ではあったが、実際にここに住むまでは、日常生活で栃木を意識したことはなかった。

最初の冬はきつかった。日中は風もなく晴れ間が広がり、心

■3

豊潤な土地 魅力発見

地よい。しかし、日が沈むと猛烈に冷え込んでくる。校舎の影など、一日中氷が解けない。自転車に乗ると手足の指先がじんじんと痛くなる。車に乗り込む際に感じる座席の冷たさも半端ではなかった。寒さに弱く(暑さにも弱い)こらえ性のない私は、温暖な南伊豆とのあまりの違いに何度も首を上げた。

ところが不思議なもので、こうした寒さにも次第に慣れ親しむようになった。日帰りで豊かな自然を満喫でき、大都市特有の密集感もない。いったん信頼を得ると、とてもあたたかく接してくれる土地柄など、「住めば都」という一言では片付けられない豊潤な魅力が、この土地にはある。

(宇都宮大学国際学部教授)